



シンバイオ製薬株式会社

2021年12月期 第2四半期決算短信〔日本基準〕(非連結)

2021年8月4日

上場会社名 シンバイオ製薬株式会社 上場取引所 東
 コード番号 4582 URL <https://www.symbiopharma.com/>
 代表者 (役職名) 代表取締役社長兼CEO (氏名) 吉田 文紀
 問合せ先責任者 (役職名) 執行役員兼CFO兼管理本部長 (氏名) 岸田 高明 (TEL) 03-5472-1125
 四半期報告書提出予定日 2021年8月5日 配当支払開始予定日 —
 四半期決算補足説明資料作成の有無 : 無
 四半期決算説明会開催の有無 : 有

(百万円未満切捨て)

1. 2021年12月期第2四半期の業績 (2021年1月1日~2021年6月30日)

(1) 経営成績(累計) (%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2021年12月期第2四半期	3,146	131.3	△194	—	△203	—	△205	—
2020年12月期第2四半期	1,360	△32.1	△1,839	—	△1,883	—	△1,884	—
	1株当たり 四半期純利益		潜在株式調整後 1株当たり 四半期純利益					
	円 銭		円 銭					
2021年12月期第2四半期	△5.37		—					
2020年12月期第2四半期	△62.47		—					

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益は、潜在株式は存在するものの1株当たり四半期純損失であるため記載しておりません。

(2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率
	百万円	百万円	%
2021年12月期第2四半期	5,493	4,451	72.4
2020年12月期	6,274	4,657	64.3

(参考) 自己資本 2021年12月期第2四半期 3,976百万円 2020年12月期 4,037百万円

2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2020年12月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2021年12月期	—	0.00			
2021年12月期(予想)			—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

3. 2021年12月期の業績予想 (2021年1月1日~2021年12月31日)

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
通期	9,151	206.4	1,361	—	1,350	—	1,149	—	29.99

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 無

※ 注記事項

(1) 四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用 : 無

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無

② ①以外の会計方針の変更 : 有

③ 会計上の見積りの変更 : 無

④ 修正再表示 : 無

(3) 発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）

2021年12月期 2 Q	38,432,981株	2020年12月期	38,202,956株
---------------	-------------	-----------	-------------

② 期末自己株式数

2021年12月期 2 Q	76,868株	2020年12月期	30,143株
---------------	---------	-----------	---------

③ 期中平均株式数（四半期累計）

2021年12月期 2 Q	38,259,460株	2020年12月期 2 Q	30,176,512株
---------------	-------------	---------------	-------------

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料5ページ「1. 当四半期決算に関する定性的情報（3）業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	5
(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明	5
2. 四半期財務諸表及び主な注記	6
(1) 四半期貸借対照表	6
(2) 四半期損益計算書	8
第2四半期累計期間	8
(3) 四半期キャッシュ・フロー計算書	9
(4) 四半期財務諸表に関する注記事項	10
(継続企業の前提に関する注記)	10
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	10
(会計方針の変更)	10
(表示方法の変更)	10
(重要な後発事象)	10

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

当第2四半期累計期間における当社事業の進捗状況は以下のとおりです。

① 国内事業

[自社販売体制の移行、事業拡大について]

当社は、2020年度において、エーザイ株式会社（以下「エーザイ」）との事業提携契約の満了にともない、2020年12月には自社によるトリアキシ[®]販売体制へ移行し、2021年度の最重要課題である収益化とその後の収益の持続的拡大という今後の事業展開を盤石なものとししました。

地域のニーズをくみ上げることで地域のニーズに合致したきめ細かい提案を企画し、より高い生産性をもつ営業組織体制を確立するため、医薬情報担当者を全国に、更には「ヘマトロジー・エキスパート」を各地域に配置しております。また、エーザイとの事業提携契約の満了に伴い、全国流通体制を確立するため株式会社ズケン及び東邦薬品株式会社との間で両者を総代理店とする医薬品売買に関する取引基本契約を締結、全国物流体制の構築では、株式会社エス・ディ・コラボとの取引を開始し、東日本と西日本の2拠点に物流センターを設置しております。

当第2四半期累計期間においては、2021年1月12日より、2020年9月に製造販売承認を取得したトリアキシ[®]点滴静注液剤 [RTD (Ready-To-Dilute) 製剤] の販売を開始しました。

2021年3月23日には、再発又は難治性びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（以下「r/r DLBCL」）を対象としたベンダムスチンとリツキシマブの併用療法（以下「BR療法」）、及びベンダムスチンとリツキシマブ、ポラツズマブ ベドチンとの併用療法（以下「P-BR療法」）の製造販売承認事項一部変更承認（一変承認）を取得し、従来のトリアキシ[®]凍結乾燥注射剤 [FD (Freeze-Dried) 製剤] のBR療法に関しては直ちに使用が可能となりました。2021年4月28日には、トリアキシ[®]RTD製剤について、r/r DLBCLを対象としたBR療法及びP-BR療法の一変承認を取得しました。更に2021年5月19日には、中外製薬株式会社（以下「中外製薬」）のポラツズマブ ベドチンが薬価収載され、P-BR療法との併用においてトリアキシ[®]の使用が可能となりました。

[製品の安定供給について]

当社は、2021年1月よりトリアキシ[®]RTD製剤の製造販売を開始し、トリアキシ[®]RTD製剤とトリアキシ[®]FD製剤の両剤形を販売しております。

トリアキシ[®]FD製剤はアステラス製薬株式会社の連結子会社であるアステラスドイッチランド社から、トリアキシ[®]RTD製剤はイーグル・ファーマシューティカルズ社（本社：米国ニュージャージー州、以下「イーグル社」）から輸入しておりますが、当第2四半期累計期間においては、輸入したバッチの二次包装と品質検査を計画通りに実行し、その結果、品質的には安定しており、現在の在庫は製品を安定的に供給し得る適正レベルを維持しております。

供給面では、トリアキシ[®]FD製剤からトリアキシ[®]RTD製剤への切り替えを、2021年末の切替率91%を目標に進めてまいります。

[抗がん剤SyB L-0501 (FD製剤) / SyB L-1701 (RTD製剤) / SyB L-1702 (RI投与) (一般名：ベンダムスチン塩酸塩またはベンダムスチン塩酸塩水和物、製品名：トリアキシ[®])]

未治療（初回治療）の低悪性度非ホジキンリンパ腫（低悪性度NHL）^(注1)及びマントル細胞リンパ腫（MCL）（2016年12月に製造販売承認を取得）、再発・難治性の低悪性度NHL及びMCL（2010年10月に製造販売承認を取得）、慢性リンパ性白血病（CLL）（2016年8月に製造販売承認を取得）を適応症として悪性リンパ腫領域においては幅広く使われております。2018年7月に日本血液学会が発行した造血器腫瘍診療ガイドラインにBR療法が新たに収載され、既承認のすべての適応症において、標準的治療の選択肢として推奨されることになりました。これにより名実ともにトリアキシ[®]が悪性リンパ腫における標準療法として位置づけられています。

また、低悪性度NHLの代表的な組織型であるCD20陽性の濾胞性リンパ腫（FL）に対して、リツキシマブのみならず新規の抗CD20抗体製剤との併用に係わる一変承認取得（2018年7月）により、オビヌツズマブ^(注2)との併用療法が治療選択肢として提供されていることに加え、腫瘍特異性T細胞輸注療法^(注3)の前処置に関する一部承認取得（2019年3月）により、国内初のキメラ抗原受容体T細胞（CAR-T）療法^(注4)「キムリア[®]点滴静注」^(注5)の前処置としてトリアキシ[®]の使用が可能となっており、再生医療等製品の前処置としての使用方法の広がりによって悪性リンパ腫における標準療法としてのトリアキシ[®]の位置づけはより強固なものとなっています。

既に承認を取得した適応症に続き、r/r DLBCLを対象とするBR療法による第Ⅲ相臨床試験については、2020年5月に一変承認申請を行い、2021年3月に承認を取得しました。2021年4月には、トリアキシ[®]RTD製剤について、r/r DLBCLを対象としたBR療法及びP-BR療法の一変承認を取得しました。更に、ベンダムスチン[®]とリツキシマブを併用投与した時の生存時間データ（全生存期間、無増悪生存期間など）を評価することは、本剤のDLBCL治療における位置付けに重要なデータとなるため、全生存期間を主要評価項目とする追跡調査試験を実施

し、試験結果を公表準備中です。また、中外製薬が、r/r DLBCLを対象としたポラツズマブ ベドチン^(注6)とBR療法との併用に対して、2020年6月に製造販売承認申請を行ったことを受けて、2020年7月に当社はトレアキシン[®]とポラツズマブ ベドチン、リツキシマブとの併用療法に対する一変承認申請を行い、2021年3月に承認を取得しました。2021年5月19日にポラツズマブ ベドチンが薬価収載され、ポラツズマブ ベドチンとBR療法との併用においてトレアキシン[®]の使用が可能となりました。本追加適応症については、これまで有効な治療方法がないため、救済化学療法として複数の抗がん剤を組み合わせた多剤併用化学療法が使われておりましたが、高い有効性と安全性が期待できる新たな治療薬の開発が切望されておりました。またBR療法につきましては、既に欧米においてr/r DLBCLの患者さんの治療に使われており、日本においても早期に使えるよう患者団体及び関係学会から厚生労働省に対して要望書が出ておりました。速やかに多くの患者さんの治療選択肢として浸透することを期待しております。

2017年9月にイーグル社との間で日本における独占的ライセンス契約を締結したトレアキシン[®]RTD製剤及び投与時間を短縮可能とする投与 [RI (Rapid Infusion) 投与^(注7)] については、RTD製剤は2020年9月18日に製造販売承認を取得し、2021年1月より販売を開始しました。RI投与につきましては、安全性に関する臨床試験が終了し、2021年5月7日に承認申請を完了しました。RTD製剤は、従来のFD製剤に比べて、手動による煩雑な溶解作業が不要で、そのために要する時間を短縮することができ、医療従事者の負担を大幅に低減することが可能となります。また、RI投与は、投与時間が、従来のFD製剤及びRTD製剤の1時間に対して大幅に短縮されるため患者さんと医療従事者の負担を大幅に低減することが可能となることから大きな付加価値を提供することができます。更には、液剤の製剤ライセンスによる複数の特許保護を通じてトレアキシン[®]の製品寿命を2031年まで延長し、当社事業の成長基盤をより強固なものとする事が可能となります。

- (注1) 非ホジキンリンパ腫とは、白血球の中のリンパ球ががん化した悪性腫瘍である悪性リンパ腫のうち、ホジキンリンパ腫以外の総称です。日本人の悪性リンパ腫では、大半を非ホジキンリンパ腫が占めています。
- (注2) オビヌツズマブ (ガザイバ[®]: 販売元中外製薬) : 非ホジキンリンパ腫の治療薬として国内外の治療ガイドラインで推奨されているリツキシマブと同様、幹細胞や形質細胞以外のB細胞上に発現するタンパク質であるCD20に結合する、糖鎖改変型タイプII抗CD20モノクローナル抗体で、標的となるB細胞を直接、および体内の免疫系とともに攻撃し、破壊するようデザインされています。
- (注3) 腫瘍特異性T細胞輸注療法とは、がん患者さん自身の腫瘍特異的T細胞 (がん細胞を特異的に認識するT細胞) に、体外で人工的にがん特異性を付与し、細胞を増幅した後に患者さんに投与する療法です。
- (注4) キメラ抗原受容体T細胞 (CAR-T) 療法は、腫瘍特異性T細胞輸注療法の中でも、腫瘍細胞上の膜抗原を認識する抗体の抗原結合部位とT細胞受容体の細胞内ドメインを組み合わせたキメラ抗原受容体 (chimeric antigen receptor; CAR) をコードする遺伝子をT細胞に導入して増幅・輸注する療法です。CARの標的としてB細胞上に発現するCD19を用いた臨床試験では、B細胞性腫瘍患者にCD19指向性CAR導入T細胞が投与され、著明な臨床効果が得られています。
- (注5) キムリア[®]点滴静注 (一般名チサゲンレクルユーセル: 販売元ノバルティスファーマ株式会社) : 国内で初めて承認されたキメラ抗原受容体T細胞 (CAR-T) 療法で、再発又は難治性のCD19陽性のB細胞性急性リンパ芽球性白血病 (B-ALL) および再発又は難治性のCD19陽性のDLBCLを適応症として2019年3月に製造販売承認を取得し、2019年5月に薬価収載されました。
- (注6) ポラツズマブ ベドチン: シアトルジェネティクス社のADC技術を使用してロシュ社が開発した、ヒト化抗CD79bモノクローナル抗体とチューブリン重合阻害剤をリンカーで結合させた、ファーストインクラスの抗CD79b抗体薬物複合体 (ADC: antibody-drug conjugate) です。CD79bタンパク質は、多くのB細胞で特異的に発現しており、新たな治療法を開発する上で有望なターゲットになり得ます。ポラツズマブ ベドチンは正常細胞への影響を抑えつつCD79bに結合し、送達された化学療法剤によりB細胞を破壊すると考えられます。
- (注7) RTD製剤及びRI投与は、従来のFD製剤とは異なり既に液化された製剤です。RTD製剤 (Ready To Dilute) は調剤作業を大幅に低減し、急速静注であるRI投与 (Rapid Infusion) により点滴時間を従来の1時間から大幅に短縮することにより、FD製剤に比べ患者さんの負担を大幅に軽減し、医療従事者に大きな付加価値を提供することが可能になります。

[抗がん剤SyB L-1101 (注射剤) / SyB C-1101 (経口剤) (一般名: リゴセルチブナトリウム)]

リゴセルチブ注射剤については、導入元であるオンコノバ・セラピューティクス社 (本社: 米国ペンシルベニア州、以下「オンコノバ社」) が、現在の標準治療である低メチル化剤による治療において効果が得られない、治療後に再発した、または低メチル化剤に不耐容性を示した高リスク骨髄異形成症候群 (高リスクMDS) における全生存期間を主要評価項目として、全世界から20ヶ国以上が参加している国際共同第III相臨床試験

(INSPIRE試験)を実施しておりますが、2020年8月に医師選択療法との比較において主要評価項目を達成しなかったことを発表しました。当社は日本における臨床開発を担当しており、INSPIRE試験の追加解析から得られた知見を今後のリゴセルチブ注射剤の開発に活用するための検討を進めてまいります。

リゴセルチブ経口剤については、オンコノバ社が米国にて実施の、初回治療の高リスクMDSを目標効能とする第Ⅰ／Ⅱ相臨床試験(アザシチジン^(注8)併用)において、リゴセルチブ経口剤とアザシチジンを併用した際の有効性および安全性が示唆されています。当社は、単剤により高用量の安全性及び日本人での忍容性を確認するために2017年6月に国内第Ⅰ相臨床試験を開始し、2019年6月に症例登録を完了しております。

トレアキシシ及びリゴセルチブに関して、東京大学医科学研究所との共同研究等を通じて、両化合物あるいは他の既存薬との併用により新たな有用性を見出すとともに新規適応症の探索を行い、事業価値の最大化に努めます。

- (注8) アザシチジン(ビダーザ[®]:販売元日本新薬株式会社):2011年にMDSに対する第Ⅲ相臨床試験において、初めて生存期間の延長が認められたことから承認された低メチル化剤(注射用)で、現在、造血幹細胞移植が難しいMDS患者に対する第一選択薬として使用されています。MDSは一種の前白血病であり、その病態にはDNAの過剰なメチル化による癌抑制遺伝子の発現の低下が大きく関係していると考えられています。アザシチジンなどの低メチル化剤はDNAのメチル化を阻害する作用により癌抑制遺伝子の発現を回復させ白血病への進行を抑えると考えられています。

[抗ウイルス薬SyB V-1901(一般名:Brincidofovir)]

当社は2019年9月30日にキメリックス・インク社(本社:米国ノースカロライナ州、以下「キメリックス社」)との間で抗ウイルス薬プリンシドフォビルの注射剤及び経口剤(SyB V-1901、以下各々「BCV IV」及び「BCV Oral」)^(注9)に関しての独占的グローバルライセンス契約を締結し、天然痘疾患を除くすべての疾患を対象としたBCVの世界全域における開発・販売に加えて製造を含む独占的権利をキメリックス社から取得しております。

「空白の治療領域」でアンメット・メディカル・ニーズの高い造血幹細胞移植後のアデノウイルス(AdV)感染症を対象に、日本・アメリカ・ヨーロッパを中心としたBCV IVのグローバル開発を優先的に進めることを決定、2021年3月に、主に小児対象(成人も含む)のアデノウイルス(AdV)感染症を対象とする第Ⅱ相臨床試験を開始するため、米国食品医薬品局(FDA)にInvestigational New Drug(IND) Application(治験許可申請)を行いました。本開発プログラムについては、2021年4月に、米国食品医薬品局からファスト・トラック(Fast track)指定を受けております。

アデノウイルス(AdV)感染症を対象とする試験により得られた有効性と安全性に関する知見に基づき、造血幹細胞移植後の各種dsDNAウイルス^(注10)感染症に対する効果を検討し、抗マルチウイルス感染症へ対象領域を拡大し、更には腎臓移植を含む臓器移植分野等の対象領域拡大の可能性を追求することで、市場の拡大とBCVの事業価値の最大化を目指してまいります。本剤は既にキメリックス社による欧米における臨床試験においてBCV Oralが高活性の抗ウイルス効果を示し、また広域のスペクトラムを有することが確認されており、各種dsDNAウイルスに対する幅広い抗ウイルス活性は、BCV IVに関しても造血幹細胞移植後の各種ウイルス感染症の予防及び治療に対する有効性と安全性が期待されます。

キメリックス社は、2020年12月、米国食品医薬品局が天然痘の医学的防衛策としてBCV Oralの新薬申請(NDA)の提出を受理したことを発表しておりましたが、2021年6月4日にFDAから承認を取得しました。

- (注9) プリンシドフォビル(BCV)は、シドフォビル(CDV、欧米では既承認・販売の抗ウイルス薬、本邦は未承認)に脂肪鎖(ヘキサデシルオキシプロピル:HDP)が結合した構造となっており、速やかに脂質二重膜へ取り込まれ効率よく細胞内へ移行した後、細胞内ホスホリパーゼによる代謝によって脂肪鎖が切り離され、生成された活性化体(CDV-PP:CDV diphosphate)が細胞内で長時間保持される結果、抗ウイルス活性が飛躍的に向上した化合物です。また、HDP結合により、OAT-1トランスポーターによる腎尿細管上皮細胞への蓄積が生じないことに加え、CDVが血中に遊離するレベルは低いいため、CDVの根本的問題であった腎毒性を回避できます。

- (注10) dsDNAウイルス(二本鎖DNAウイルス): サイトメガロウイルス(CMV)、アデノウイルス(AdV)、ヒトヘルペスウイルス6型(HHV-6)、単純ヘルペスウイルス-1型又は2型(HSV-1/2)、BKウイルス(BKV)、水痘帯状疱疹ウイルス(VZV)、ヒトパピローマウイルス(HPV)、JCウイルス、天然痘ウイルスなど、ヘルペスウイルス科、アデノウイルス科、ポリオーマウイルス科、パピローマウイルス科、ポックスウイルス科を含む。

② 海外事業

SyB L-0501については、中国、香港においても販売されており、当社の売上は計画通りに推移しました。

③ 新規開発候補品の導入

当社は2019年9月に導入した抗ウイルス薬プリンシドフォビルのグローバル開発計画の推進に当面は注力し、従来からの取り組みである常時複数のライセンス案件の検討と新薬開発候補品のライセンス権利取得に向けた探索評価の継続的な実施を通じて、収益性と成長性を兼ね備えたバイオ製薬企業として長期的な事業価値の創造を目指してまいります。

④ 経営成績

当第2四半期累計期間の売上高は、3,146,608千円（前年同期比131.3%増）と、エーザイから自社販売に移行した事等により大幅に増加しましたが、自社販売に移行する2020年12月以前にエーザイが販売したFD製剤の市中在庫が消化された影響、更には2020年末からの新型コロナ感染拡大による治療の遅延、施設訪問の規制強化が営業活動の制約となったこと等の悪化要因により、伸び悩みました。一方、第3四半期以降に関しましては、高齢者を対象とした新型コロナワクチン接種等新型コロナ対策の進展に伴う治療遅延の解消が徐々に進み、また3月23日に承認となったBR療法及びP-BR療法のr/r DLBCLの適応追加、並びに5月19日に中外製薬のポラツズマブ ベドチンが薬価収載されたことにより、r/r DLBCLの売上の増加が本格化することが見込まれます。

販売費及び一般管理費は、トレアキシンの注射剤及びプリンシドフォビル注射剤の臨床試験費用等が発生したこと等により研究開発費として912,268千円（前年同期比9.4%増）を、自社販売体制への移行による販売費の増加を含め、その他の販売費及び一般管理費として1,557,439千円（前年同期比16.6%増）を計上したことから、合計で2,469,708千円（前年同期比13.8%増）となりました。

これらの結果、当第2四半期累計期間の営業損失は194,941千円（前年同期は営業損失1,839,942千円）となりました。また、受取手数料14,757千円を主とする営業外収益14,858千円を計上した一方、為替差損17,991千円、支払手数料4,487千円を主とする営業外費用23,774千円を計上したこと等により、経常損失は203,858千円（前年同期は経常損失1,883,076千円）、四半期純損失は205,560千円（前年同期は四半期純損失1,884,976千円）となりました。

なお、当社の事業は医薬品等の研究開発及び製造販売並びにこれらの付随業務の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しています。

(2) 財政状態に関する説明

当第2四半期会計期間末における総資産は、売掛金が653,113千円、商品及び製品が259,927千円、前払費用が101,116千円、半製品が92,658千円増加した一方、現金及び預金が1,521,796千円、未収消費税等が314,761千円、ソフトウエアが26,030千円減少したこと等により、前事業年度末に比べ781,064千円減少し、5,493,642千円となりました。

負債の部については、未払消費税等が128,029千円、未払法人税等が9,725千円増加した一方、買掛金が528,282千円、未払金が154,305千円減少したこと等により、前事業年度末に比べ574,807千円減少し、1,042,581千円となりました。

純資産の部については、資本剰余金が102,113千円、資本金が101,889千円増加した一方、四半期純損失の計上により利益剰余金が205,560千円減少し、新株予約権が145,552千円減少したこと等により、前事業年度末に比べ206,257千円減少し、4,451,060千円となりました。

この結果、自己資本比率は72.4%と前事業年度末に比べ8.0ポイント増加しました。

(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明

第2四半期累計期間における、営業損失は194,941千円、経常損失は203,858千円、四半期純損失205,560千円となったものの、第2四半期のみでは、営業利益15,577千円、経常利益5,049千円、四半期純利益4,099千円を達成しており、第3四半期以降にr/r DLBCL承認や中外製薬のポラツズマブ ベドチンが薬価収載されたことの影響が本格化することを考慮すると、2021年12月期の各利益レベルにおける黒字転換の蓋然性は高まってきております。なお、2021年12月期の業績予想については現時点で変更はありません。

2. 四半期財務諸表及び主な注記

(1) 四半期貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (2020年12月31日)	当第2四半期会計期間 (2021年6月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,848,626	2,326,829
売掛金	406,988	1,060,101
商品及び製品	271,550	531,478
半製品	672,891	765,549
前払費用	80,645	181,761
未収消費税等	314,761	—
その他	219,828	200,613
流動資産合計	5,815,292	5,066,335
固定資産		
有形固定資産		
建物（純額）	42,735	40,936
工具、器具及び備品（純額）	33,966	29,094
有形固定資産合計	76,701	70,031
無形固定資産		
ソフトウェア	296,005	269,974
ソフトウェア仮勘定	5,836	—
無形固定資産合計	301,841	269,974
投資その他の資産		
子会社株式	0	0
敷金及び保証金	80,871	87,301
投資その他の資産合計	80,871	87,301
固定資産合計	459,415	427,307
資産合計	6,274,707	5,493,642
負債の部		
流動負債		
買掛金	665,460	137,177
未払金	645,813	491,508
未払法人税等	81,928	91,653
未払消費税等	—	128,029
その他	222,137	191,834
流動負債合計	1,615,339	1,040,203
固定負債		
退職給付引当金	2,050	2,378
固定負債合計	2,050	2,378
負債合計	1,617,389	1,042,581

(単位：千円)

	前事業年度 (2020年12月31日)	当第2四半期会計期間 (2021年6月30日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	17,044,943	17,146,833
資本剰余金	17,019,485	17,121,599
利益剰余金	△30,009,713	△30,215,273
自己株式	△17,538	△76,686
株主資本合計	4,037,177	3,976,472
新株予約権	620,140	474,588
純資産合計	4,657,318	4,451,060
負債純資産合計	6,274,707	5,493,642

(2) 四半期損益計算書
(第2四半期累計期間)

(単位：千円)

	前第2四半期累計期間 (自2020年1月1日 至2020年6月30日)	当第2四半期累計期間 (自2021年1月1日 至2021年6月30日)
売上高	1,360,648	3,146,608
売上原価	1,030,749	871,841
売上総利益	329,898	2,274,767
販売費及び一般管理費	2,169,841	2,469,708
営業損失(△)	△1,839,942	△194,941
営業外収益		
受取利息	120	32
還付加算金	120	68
受取手数料	—	14,757
その他	2	0
営業外収益合計	244	14,858
営業外費用		
支払手数料	1,495	4,487
株式交付費	22,896	1,296
為替差損	18,985	17,991
営業外費用合計	43,377	23,774
経常損失(△)	△1,883,076	△203,858
特別利益		
新株予約権戻入益	—	198
特別利益合計	—	198
税引前四半期純損失(△)	△1,883,076	△203,660
法人税、住民税及び事業税	1,900	1,900
法人税等合計	1,900	1,900
四半期純損失(△)	△1,884,976	△205,560

(3) 四半期キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

	前第2四半期累計期間 (自 2020年1月1日 至 2020年6月30日)	当第2四半期累計期間 (自 2021年1月1日 至 2021年6月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前四半期純損失 (△)	△1,883,076	△203,660
減価償却費	20,405	45,710
株式報酬費用	55,106	58,194
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	177	328
受取利息	△120	△32
為替差損益 (△は益)	20,272	△14,239
支払手数料	1,495	4,487
株式交付費	22,896	1,296
新株予約権戻入益	—	△198
売上債権の増減額 (△は増加)	314,728	△653,113
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△151,893	△352,586
前払費用の増減額 (△は増加)	△45,249	△101,116
立替金の増減額 (△は増加)	27,066	—
未収消費税等の増減額 (△は増加)	139,809	314,761
その他の流動資産の増減額 (△は増加)	△32,022	19,215
仕入債務の増減額 (△は減少)	72,990	△528,282
未払金の増減額 (△は減少)	△155,565	△152,360
その他の流動負債の増減額 (△は減少)	1,536	109,352
その他	440	582
小計	△1,591,002	△1,451,660
利息及び配当金の受取額	121	32
法人税等の支払額	△1,900	△3,800
コミットメントフィーの支払額	—	△4,487
営業活動によるキャッシュ・フロー	△1,592,780	△1,459,916
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△9,955	△3,464
無形固定資産の取得による支出	△68,451	△3,627
敷金及び保証金の差入による支出	△11,377	△7,011
投資活動によるキャッシュ・フロー	△89,785	△14,104
財務活動によるキャッシュ・フロー		
新株予約権の行使による株式の発行による収入	3,215,468	230
新株予約権の発行による収入	10,540	—
株式の発行による支出	△20,494	△3,321
自己株式の取得による支出	△4,129	△59,336
自己株式の処分による収入	321	413
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,201,706	△62,015
現金及び現金同等物に係る換算差額	△20,272	14,239
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	1,498,867	△1,521,796
現金及び現金同等物の期首残高	3,910,830	3,848,626
現金及び現金同等物の四半期末残高	5,409,697	2,326,829

(4) 四半期財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

当社は、当第2四半期累計期間において、第32回、第33回、第35回、第36回、第37回、第38回、第40回、第41回、第43回及び第44回新株予約権の一部について、権利行使による新株の発行を行ったことにより、資本金が101,889千円増加、資本準備金が101,890千円増加し、自己株式の取得により自己株式が59,337千円増加しております。

さらに、単元未満株主の売渡請求による自己株式の処分を行ったことにより、自己株式が189千円減少、その他資本剰余金が224千円増加しております。

この結果、当第2四半期会計期間末において資本金が17,146,833千円、資本剰余金が17,121,599千円、自己株式が76,686千円となっております。

(会計方針の変更)

(たな卸資産の評価方法の変更)

たな卸資産の評価方法は、従来、総平均法によっておりましたが、第1四半期会計期間より商品及び製品は先入先出法、半製品は総平均法によって評価しております。この評価方法の変更は自社販売体制への移行を契機として、たな卸資産の動きを詳細に把握することが可能となり適正なたな卸資産の評価及び期間損益計算の観点からたな卸資産の定義及び評価方法について再度検討したことによるものです。

この結果、当社の保有するたな卸資産の動きとより整合させるため商品及び製品は先入先出法、半製品については総平均法を採用することが、たな卸資産の評価及び期間損益の観点から合理的であり、かつ当社の経営実態をより適切に反映すると判断しました。

なお、この変更による影響額は軽微であるため、遡及適用は行っておりません。

(表示方法の変更)

(貸借対照表関係)

当社は、自社販売体制への移行を契機として、たな卸資産の動きを詳細に把握することが可能となり適正なたな卸資産の評価及び期間損益計算の観点から商品及び製品、半製品の定義を見直しております。

この結果、前事業年度末の貸借対照表において、流動資産の「商品及び製品」に表示していた944,442千円は、「半製品」672,891千円及び「商品及び製品」271,550千円として組み替えております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。